第13課　管理者の務めの結果

【暗唱聖句】

「また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります」第一ペテロ2:12

【今週のテーマ】

【日曜日・管理者の務めと信心】

「信心を装いながら、その実、信心の力を否定するようになります。こういう人々を避けなさい」第二テモテ3:5

良き管理者は信心深い人です。信心と訳されているギリシャ語はユーセベイアで、これは真の信心、真の敬虔、神に対する真の畏敬の念を表す言葉です。しかし、信心深い態度を装いながら、その実、信心の力を否定する人たちがいます。聖書はそのような人たちを避けなさいと教えています。どういう人がそのような状態となるのかといえば、「自分自身を愛し、金銭を愛し、ほらを吹き、高慢になり、神をあざけり、両親に従わず、恩を知らず、神を畏れず、また、情けを知らず、和解せず、中傷し、節度がなく、残忍になり、善を好まず、人を裏切り、軽率になり、思い上がり、神よりも快楽を愛する人」です。このような人を避けなさいと聖書は教えているわけですが、わたしたち自身がこのような見せかけのクリスチャンになることがないように注意しなければなりません。

ヨブは「無垢な正しい人、神を畏れ、悪を避けて生きてきた」と書かれてあります。どのような苦難の中にあっても信心が揺らぐことがありませんでした。どこまでも神様に対して真実で、敬虔でした。神様はそのことをよくご存じであり、悪魔はそのことを憎みました。

「たとえ、その中に、かの三人の人物、ノア、ダニエル、ヨブがいたとしても、彼らはその正しさによって自分自身の命を救いうるだけだ、と主なる神は言われる」エゼキエル14:14

ノアもダニエルもヨブも、その信心深さはその生き方の中で現れていました。良き神の管理者は、信心深いものであり、それが行動となって、生き方の中に反映されていくのです。

【月曜日・満足】

「物欲しさにこう言っているのではありません。わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです」フィリピ4:11

良き管理者は自分の置かれた境遇に満足します。信心深い生き方の一つの現れは、いま与えられているもので満足できるということです。自分の置かれた境遇に満足するというのはとても大切なことであり、逆にいま置かれている環境に不平不満を述べたり、人の暮らしをうらやんだりするのは、神様の御心ではありません。ただパウロは、そのような生き方ができるように努力せよと言っているのではなく、このことを習い覚えたと言っています。つまり、パウロも最初からそうできたのではなく、神様への信仰が深まるにつれて、そうできるようになったと言っているのです。神様への信仰が深まるにつれて、色々な面で生活が変わり始めるということです。ところが、そうではない人たちもいるようです。

「絶え間ない言い争いが生じるのです。これらは、精神が腐り、真理に背を向け、信心を利得の道と考える者の間で起こるものです」第一テモテ6:5

信心を利得の道と考える者たちがいました。これは現代でもしかりです。宗教ビジネスと呼ばれるものは、キリスト教の中にも入り込んできています。特に、アメリカでは大きな問題と考えている人たちが少なくないようです。ただ、この点に関してパウロは次のようにも語っています。

「もっとも、信心は、満ち足りることを知る者には、大きな利得の道です。なぜならば、わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです」第一テモテ6:6、7

信心は満ち足りることを知るということにおいて、大きな利得の道であるとパウロは言っています。なぜなら、わたしたちは「何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです」。この世の物に執着していれば、約束のみ国に目を向けることができません。だから、信心が自分の置かれた境遇に満足することを得させてくれるのなら、それは大きな利得の道なのだというわけです。

【火曜日・信頼】

「心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼らず」箴言3:5

良き管理者は「心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼」りません。しかし、頭でわかっていても、これは口で言うほど簡単なことではありません。では、どのようにして主に信頼することを学べば良いのでしょうか。それは主の教えに従い、信仰によって一歩踏み出すことです。経験によって自分の分別に頼るよりも、主に信頼するほうが素晴らしい結果に導かれることを知ることが大切です。信頼するとは心の動きです。「心を尽くして」と強調されているように、それは中途半端ではいけません。心から主を信頼していくことが重要です。

　先のことが見えない不安は誰にでもあります。分別のあるこの世の管理者であれば、財産をどのように使っていくかで問題を良い方向に解決しようとすることでしょう。無分別な生き方は正しいことではありません。しかし、その分別以上に大切なことがあって、それが主に信頼することです。神様の財産を正しく管理している者たちは、この世の財産よりも、神様の力に信頼するほうがより大切で素晴らしいことであることをちゃんと知っているのです。

【水曜日：私たちの影響力】

「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています」エペソ5:8

良き管理者は、周りに対しても良い影響を与えます。暗き世にあって光として輝くようになるのです。それは主に結ばれているからです。光の主に結ばれて生きるので、いつも光の中を歩くようになり、そればかりか主の光が反映されて、やがて主に結ばれているその人の中から、その光が輝くようになります。たとえば、その光は正しい行いの中に表されます。

「あなたの正しさを光のように、あなたのための裁きを真昼の光のように輝かせてくださる」詩編37:6

光の主に結ばれている人は、正しい生き方をするようになっていきます。その正しい生き方が光となって暗き世に輝くのです。これは良き管理者としての証となります。わたしたちの職業倫理なども、この管理者としての務めの価値観と一致していなければなりませんが、これは自然なことです。

【木曜日：聞きたい（聞きたくない）言葉】

「主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』」マタイ25:21

「そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ。』」マタイ7:23

最後にわたしたちは2つの言葉のうちどちらかの言葉を神様から聞くことになります。それは「忠実な良い僕だ。よくやった」という言葉か、あるいは「あなたたちのことは全然知らない」という言葉です。前者は聞きたい言葉ですが、後者は誰も聞きたくない言葉でありましょう。

管理者として、「よくやった」という言葉は、最も聞きたい言葉です。忠実さが誉められるのです。「お前は少しのものに忠実であった」と書かれてあるように、神様はわたしたちに不可能と思えるような事柄を要求されていたのではありません。それは小さなことなのです。その小さな、少しのものに忠実であるとき、「忠実な良い僕だ。よくやった」と言ってくださるのです。そしてそれゆえに「多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」という言葉が後に続きます。このような言葉をいただけるものでありたいものです。